

大学での方言教育において授業者及び受講者の制作した方言教材 —授業名「群馬の言葉とこども」—

佐藤 高司¹

1 はじめに

本発表は、大学における方言教育の授業概要を提示、解説し、当該授業において授業者及び受講者が制作した方言教材を公開するものである。

2 方言教育の授業概要

当該授業の授業名は「群馬の言葉とこども」である。受講者は、主に、小学校教員免許取得希望者や日本語教師養成プログラム受講者である。授業の目的は、日本語や日本語方言、群馬県方言についての理解を深め、日本語や言語に関する教養を高めるとともに、教師としての教育力の向上を図ることである。受講者は、日本語方言の基礎を学んだ後、方言に関する教材（方言かるた、方言すごろく、方言紙芝居、方言クイズなど）の作成を行い、作成した教材を活用する国語科教育や日本語教育などの授業案や活動案を制作する。

3 方言教育の授業シラバス（概要）

第1回	ガイダンスとして授業の概要の説明を受ける。説明の中で、「上州弁チェック」を行い、自方言を認識する。
第2回	「ぐんま方言かるた」を体験し、群馬方言の特徴を学ぶ。 過年度受講生の授業案および制作作品を知り、群馬方言に関する図書の紹介を受ける。
第3～12回	指定教科書である木部ほか（2013）をもとに方言学の基礎を学ぶ。 各章を分担して、発表を行う。発表後には受講者全員で意見交換を行う。必要があれば教師による補足説明を受ける。 第8回には、グループづくりを行い、教材の内容や授業案・活動案を検討・決定する。 第9回には、「教材・活動計画書」及び必要な材料の請求書を提出する。
第13回	教材づくり、授業案・活動案づくりのまとめの作業を行う。
第14・15回	発表会。教材と授業案・活動案を発表し、意見交換をするとともに、相互評価を行う。

4 授業者の作成した方言教材

4-1 ぐんま方言かるた

2012年4月制作開始、同年12月発売。群馬県方言をテーマに、方言語彙のほかアクセントや新方言、学校方言等を取り入れた群馬県初の方言かるたである。

制作は、群馬方言研究（佐藤高司ゼミ）、美術教育（本多正直ゼミ）、産学連携（兼本雅章ゼミ）の研究者及び学生からなる制作プロジェクトによる。このプロジェクトは、企画から制作、



¹ さとう たかし(共愛学園前橋国際大学) satotaka@c.kyoai.ac.jp

販売まで、すべてを学生が主導した。プロジェクトの目的は、地域文化及び地域文化教育への貢献、地域経済の活性化である。

4-2 『群馬県民の知らない上州弁の世界 「ぐんま方言かるた」の秘密』

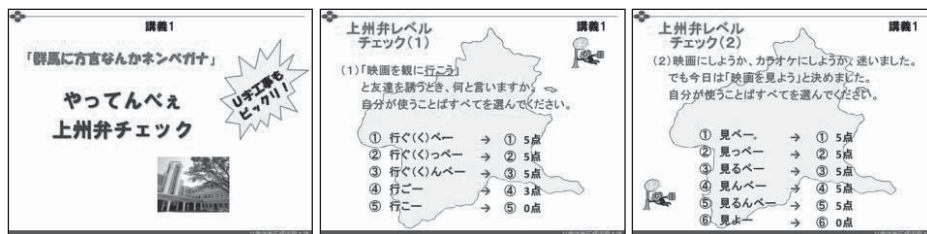
2017年3月出版。「ぐんま方言かるた」の読み札の解説を中心とする図書である。2012年度の同かるた発売以降、学生による同かるたプロジェクトは、群馬県方言の保存・継承及び群馬県の地域文化・地域教育への貢献を目的に方言教育活動を展開しており、本書はその活動の一つである。プロジェクト活動の中心は、「ぐんま方言かるた大会」の企画運営である。大会は2016年度で第4回を数える。その他のプロジェクト活動は、かるた体験会や授業や講座などのサポート活動、講演、教育補助等の地域の要望に応える形での活動等である。



『群馬県民の知らない上州弁の世界』

4-3 上州弁チェック

「やってんべえ 上州弁チェック」と題するパワーポイントによるスライド形式の教材である。自方言に興味を持たせることを目的に、講義や講座の導入時に使用する。受講者は、10の質問に対して複数の選択肢の中から当てはまる回答を選び、自己採点方式で記入用紙に点数を記入、合計することで、自分の上州弁のレベル（1～5）を自己診断できるようになっている。



上州弁度チェック（一部）

5 学生の作成した方言教材

5-1 方言すごろく

「ぐんま方言かるた」すごろく（写真）は、同かるたの札を散りばめ、群馬県内の観光地などを楽しく学びながら巡るすごろくである。子どもたちが群馬県内の名産品、産業、文化、名所などを遊びながら知ることができるようにという目的で、同かるたの絵札制作を担当した学生が自主的に作成したものである。試作版（Ver.1）は2014年度のかるた大会の参加賞として配付した。すごろくで止まるポイントを増やすなどして内容をより向上さ



「ぐんま方言かるた」すごろく

せた 2015 年度版 (Ver. 2) は、『群馬県民の知らない上州弁の世界 「ぐんま方言かるた」の秘密』の付録となっている。ほかに模造紙大の「全国方言すごろく」などもある。

5-2 方言紙芝居

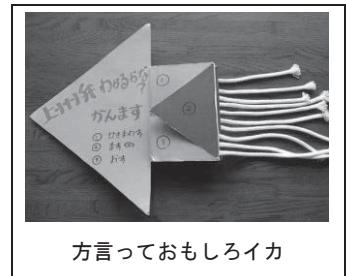
群馬方言版デジタル紙芝居「桃太郎」(写真)は、群馬県方言を意識的に取り入れた台本による台詞と自作のライドとを同時に取り込んだパワーポイントファイルの電子紙芝居である。かるたプロジェクトの学生メンバーが作成した。PC で繰り返し紙芝居を上映することができる。2015 年のワークショップ「ぐんま方言であそぼう！」(於：前橋児童文センター)で上映、児童に紙芝居を印刷した冊子を参加賞として配付した。



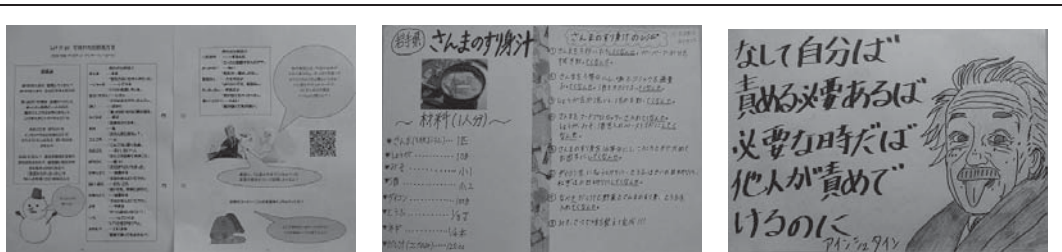
このほかの方言紙芝居には、地域に伝わる民話を方言紙芝居にした「河童とアメ玉」、群馬県の特産品を取り入れた方言紙芝居「こんにゃ郎」や「群馬県産の桃から生まれたももたろう」、オーソドックスな方言紙芝居「白雪姫」などの作品がある。

5-3 様々な方言ブック

方言ブックは多種多様である。群馬県方言に関するクイズを鳥賊の形にした「方言っておもしろイカ」(写真)は、子供が喜びそうな遊び心のある作品である。鳥賊の足に見立てた紐で次の問題に進み、番号の紙をめくると隠れている答えが出てくるので、一人でもクイズに答えることができる。



「みんなのうた群馬方言 ver.」(写真)は、身近な楽曲を群馬県方言の歌詞に書き換え、方言の解説もつけている。「日本列島方言レシピ集」(写真)は、日本各地の料理レシピをその土地の方言で記述している。「世界の名言 津軽弁 ver.」(写真)は、世界の著名人の名言を津軽弁に翻訳したものである。これらのほかにも「方言告白ブック」等があり、アイデア次第で様々な方言ブックを制作することができる。このような教材づくりは、総合的な学習の時間等で、国語科と他教科とを融合させるような授業展開に有効である。



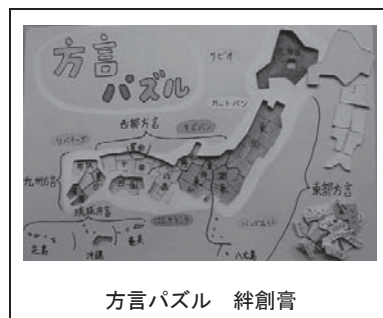
みんなのうた群馬方言 ver.

日本列島方言レシピ集

世界の名言 津軽弁 ver.

5-4 その他の方言教材

「方言パズル 絆創膏」(写真)は、画用紙に絆創膏の方言地図を描き、それぞれの形に切り抜いた都道府県を埋めて、日本列島を完成させるゲーム感覚の方言パズルである。方言教材は、その教材としての目的の設定を見失わなければ、「方言新聞」「方言絵本・昔話」「方言ゲーム」「方言パズル」「方言トランプ」「方言カード」等々、アイデアと工夫次第で、楽しみながら方言に親しみ、教育にも取り入れることのできる作品となる。



6 おわりに

大学における学びは、もはや教科書と黒板と教師の語りだけでは成り立たないということはいま言うまでもない。アクティブラーニングの時代である。学生が理解したこと、学んだことを、学生の思考を通して形にすることで、それがどのような形であれ、初めて学生自身の本当の理解となり学びとなるのである。幸いなことに方言教育は以前からフィールドワークというアクティブラーニングの技法を持つてはいるが、その学びの実践には、事前準備やノウハウなど様々な難題があることも事実である。本発表では、フィールドワークに頼らない大学での方言教育におけるアクティブラーニングの例を提示した。方言のよさとは話者の気持ちや感情を伝えることだと教科書で理解し、期末試験で高得点を得た学生がいたとしても、自分の生まれ育った地元の言葉で方言絵本、方言紙芝居、方言小説を作成した学生の理解や学びには遠く及ばないであろう。

教材を作成するとなると、作成した教材の面白さや楽しさ、あるいはその出来栄ばかりに評価の視点が向きがちである。しかし、ここで評価しなければならないことは、作成した教材を通して、学生が何を理解し、何を学び、何を表現し伝えようとしているのかということである。方言教育にアクティブラーニングを取り入れた際、指導者として最も大切なことは、学生が方言を知りあるいは調べるといふ学びの中で、どのように思考し、どのような視点から方言というものをとらえその意味や価値をどう考えたかということを正確に評価することである。

参考文献

- 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ 2013『方言学入門』(三省堂)
- 佐藤高司 2013「「ぐんま方言かるた」読み句の制作過程とその特徴」共愛学園前橋国際大学論集 第13号
- 佐藤高司 2015「言語教育の基礎としての方言教育」共愛学園前橋国際大学論集 第15号
- 佐藤高司 2016「これからの方言教育のあり方ー「ぐんま方言かるた」を用いた実践活動をもとにー」共愛学園前橋国際大学論集 第16号
- 佐藤高司 2017「現職教員への方言教育」共愛学園前橋国際大学論集 第17号
- 佐藤高司・本多正直 2017『群馬県民の知らない上州弁の世界 「ぐんま方言かるた」の秘密』上毛新聞社